

2010年3月、「Tenri International conference 2010」と題した研究会をリュブリャナ大学の研究者と共に開催しました。テーマは「Life, Death, and Dying in Intercultural Perspective」。この企画は、前年の1月にインドのバンガロールで開かれた「国際ホワイトヘッド会議」で、スロベニアにあるリュブリャナ大学哲学科教授のマヤ・ミルチンスキーさんと知遇を得たことが始まりでした。彼女は、日本を含む多くの国々での留学経験を持つ、東洋哲学および東洋思想、特に道教を専門とする研究者です。出会ったのは、会議の最終日でしたが、話を進めるうちに、お互いの国における「自死（自殺）」の多さが話題となりました。人が自ら死んで行くということは、個人的な問題ということもできるかもしれない。しかし、実はその人が存在する社会やその社会が形成してきた文化の影響も十分に考慮すべきで、そうしなければ、自死者は減らないのではないか、というようなことを話したように思います。そのような中、「『生死』をめぐるワークショップを天理大学と共同開催したい」と提案され、その提案を研究所で協議し、これを受けることになって、前記の研究会が実現しました。その際、長く「死生学」の研究を続けている島蘭進東京大学大学院教授にも加わっていただき、当日のコメントおよび議論に参加していただきました。彼女は、リュブリャナ大学哲学科のミラン・ボゾヴィック教授、アナ・ペーヴェラキェアさんと共に来日しましたが、3人は「生と死」および「死んで行くこと」、特に「死の過程とその間際」という点に注目し、哲学的に研究するプロジェクトを進行中でした。当日の発表でも、スロベニアにおける自殺者の多さがこの研究プロジェクトの問題意識の一つであると述べました。

今もそうですが、当時の日本でも自死者の多さが深刻に受けとめられていました。平成18年(2006)には、「自殺対策基本法」ができ、社会全体で自死者を減らしたいと考えられるようになりました。この法律には、自死の予兆に気付くこと、どうしたら気付けるのかなどがもりこまれています。その後も年間の自死者は3万人を超え、この法律が有効に働いて、日本という社会が「死を強くない」社会へと向かっているかどうかは、まだ、わかりません。

ところで、私たちが所属するこの社会には、おおむね社会が「善し」とした「社会通念」があります。社会通念は、一般にその社会で生きていく上でかなり“有効”なもので、これにしたがって行けば、多くのことがスムーズに進行していきます。しかしながら、時にこの社会通念は習俗や慣習、風習などと呼ばれて、人に“理不尽な”犠牲を強いることがあります。大学の授業で「文化と人間」をジェンダーという視点で取り上げていますが、この場合の犠牲者は圧倒的に女“性”が多く、明らかなジェンダー格差があります。FGM、名誉の殺人、ダウリーをめぐる虐待や殺人などは、「彼女」が自らの所属集団で「人として普通に生きていくために」行われる儀礼や慣習が原因で「死」に至らなければならないことがあり、世界的な関心事となっています。こうした事例は、“性”が生死を分ける指標であることを端的に示していると同時に、その社会構造がど

のようなものかも表しているといえるでしょう。そうして、このような“理不尽な死”を、社会に生きる私たちが共有して考えることは、私たち人間がどのような未来を目指していこうとしているのかを考えることではないかと思うのです。

2011年度からおやさと研究所では「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題」をテーマに研究会を不定期に開いています。これは、前述のリュブリャナ大学との共同研究や自死や孤独死の問題、世界の“理不尽な死”や貧困に起因する死なども念頭においた研究会です。そこでは、

現代の先進国社会では、生や若さが唯一価値あるもので、老いや病や死は否定すべきものと位置付けられている。とりわけ死は、私たちの生活のあらゆる場面において遠ざけられ、隠されてしまっている。そのため、「死を迎える」ことも「死を看取る」ことも「死を見送る」ことも忘れ、もはや身近な「死」から学ぶことができなくなっている。現代、ことさらに「死の準備教育」や「死生学」の必要が説かれ、実践が行われているのも、死が遠ざけられているために私たちがあらためて死について学びなおさねばならないことを示しているのである。

その一方、貧困に苦しむ人々や紛争地域において死は日常的に現前する。国家間の南北格差が施療の機会や質に影響し、戦争やテロが死を正当化することさえある。グローバル化した世界では、格差は人の死にもおよび、時として、文化や宗教がその背景として横たわっている。南の世界の死が北の世界の人々の生のあり方に基因していないと誰がいうのだろうか。

という問題意識があります。さまざまな死は、否応なしに人の「生」「生き方」に関わっていて、遺された人々、生きている私たちに對してこそ、死の事実として存在するのです。ですから、死の事実は、私たちの生の現実に投げかけられている事象として共有しつつ、学ぶことが肝要となります。それなら、人の生を導こうとする宗教は、この現代世界にどう働きかけることができるのでしょうか。

人間は人間究極の課題である死をどう見つめ、どう受け止めていけばいいのでしょうか。どの宗教も、死を単に生物学的・社会学的に捉えるだけではなく、いわゆる「いのち」ということばに言い表わして、生死を一環して語ってきました。そこで、本稿では、いくつかの主要な宗教の死生観を概略し、死の事実、特に“理不尽な死”の現況を紹介しつつ、「いのち」の現在を見つめていくことにします。それが「生」を考えていくことになり、一方では「死の準備教育」「スピリチュアルケア」や「グリーフケア」へと向かい、他方では、“理不尽な死”を止めることができる方向へと向かえるよう念じながら進めていきたいと思えます。

「どんなものにも用がある」。ラジオから流れてきたことばです。まさに、人は「意味」を求める存在なのです。ですから、「無駄な死」も「意味のない生」もないのだと思い、生死の課題に向かっていくのでありましょう。